
不思議な関係

いおり

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
不思議な関係

【Nコード】
N9547C

【作者名】
いおり

【あらすじ】
伊緒乃は、高生にある七不思議のひとつ“あかずの廁”をあけたことから、彼女の身体に宇宙人イオが居候することになった。ちょっとエッチで軽いが妙な正義感にあふれたイオに伊緒乃はふりまわされっぱし。

第一話：へんてこな居候

どこの学校にも大抵あるんですよ、七不思議とか怪談話とか、そういう類の怖いお話が……。

そして、我が校にもあるんですよえゝ、そんなのが……。

何でも夜遅くになると赤ん坊の泣き声がゝ、なーんていうのではないんですがね。

“あかずの廁”早い話があかないトイレ。

いつからだかわかんないんだけど、もうずっとドアがひらかないんですって。

一説によると、いじめを苦にした少女が、トイレの壁一面に彼女の血で恨みつらみをしたためて自殺したためだとか。

それ以来、何人もの人がこのトイレをあけようと試みたらしいけれど、無駄だったんですって。

そして、それが、今、目の前にあるんですよ、いやですねえゝ、怖いですねえゝ、それでは、さよなら、さよなら、さよなら……。

「おーら！ どこ行きだよ！」

どすの利いたハスキー・ボイスが、薄暗くなったトイレに響き渡る。

「ちんたらちんたらしてねーで、さつさとやんな！」

アフロヘアーに長いスカート、今時こんな時代遅れの不良がよくいたもんだ。

だが、彼女には彼女なりのポリシーがあるらしい。

わたしにはとうてい理解不可能だが。

そして、彼女の名前が“良子”不良が良子、まったく笑っちゃうよね。

「ねえ良ちゃん、伊緒乃ちゃんが可愛そう、もうやめましようよ」

サラサラの長いストレートヘアーを、ピンクのリボンで耳の上に左右に結んだ、お嬢様タイプの沙羅が、助け舟を出してくれた。

「なんでだよ、伊緒乃のやつが言い出したんだぜ、あかずの廁がほんとうにあかないのになって。それに、じゃんけんに負けたのは伊緒乃だし……」

さすがの良も、沙羅相手だと口調が妙に優しくなる。

まったくもう、わたしに対する態度と全然違うんだから。

「はい、はい、わかりました！ あけりやあいいでしょ、あけりやあ」

ふん、たかがトイレごときにびくつくわたしじゃないわよ。

足を踏ん張り、ノブを回して、力いっぱい引つ張った。

わあゝ！

予想に反して無抵抗にあいたドアに余りすぎた力が、わたしを床に叩き付けた。

いてっ、て、て、て……。

あれ？ 勢いで大げさに痛がってしまったが、どうしたわけかまったく痛みを感じない。

痛みがあるであろうお尻の辺りを触ってみたが、なんだか雲をつかむように頼りない。

痛みどころか、触れた感触も無いのだから。

その上、目の前真っ暗、なんにも見えない、自分の身体もあるのだからさえわからない。

今となつては、さっき触つたと思つたお尻も、本当にあつたのかも確信できない。

わたし、死んじやつたのかなあ？

えーっ、でもまだ、十六歳だよ、死ぬには早すぎるって。

しかも、トイレのドアを思いつきり引つ張つて死んだなんて、みんなのいい笑いものだよ。

お父さんもお母さんも恥ずかしくって街なかを歩けなくなっちゃう、お兄さんだって学校へも行けなくなって引きこもりなんかなになっちゃうって、最後は家庭崩壊！

え〜！ いったいわたしはどうすればいいの？

『クツ、クツ、クツ……』

暗黒の世界のどこからか、くぐもった笑い声が響いてくる。

『だ、だれよ！』

なんだか不気味で、声を上げずにいたら気絶しそうだった。

声といっても声ではない感じだし、死んでいるのだったら気絶するっていうのもおかしい気がする。

『声じゃないよ。きみたちの世界でいうところのテレパシーみたいなものかな？』

“へえ〜、これがテレパシーなんだ”って感心してる場合じゃないじゃないで、だって今、心の中で思っただけのことに返事があったのだ。

それって、なに？ わたしの考えが筒抜けってこと？

『そういうこと』

ちょっと待ってよ。

頭を整理しなくっちゃ。

えっとおー。

あつ、そうそう、初めて会った人には、まずは自己紹介ね。

『わたしは浅田伊緒乃です』

『俺、イオ・グランデスカ・フォーレ・9844・ドレッチ』

『ん？ イオ、グラン、ナンデスカ、ドレス？』

『イオでいいよ。 イオノとイオ、一文字違いなんて、なんだかきみとは運命を感じるね』

『そんなもん感じなくっていい！』

『つれないなあ、そんないけずいわんかていいやないの』

はあ？ なんなんだ、このへんなやつは。

もし、ここが死後の世界だとしたら、こいつが神様？ えー！

絶対ありえない！

だとすると、だれ？ 悪魔？ って感じでもないか。

あつ！ ひょっとして、あかずの厠で自殺した少女の霊？

でも、声の感じ、いや、テレパシーの感じからすると男みたいだけど、最後の妙な京都弁は女のような気もしないでもないか。

いきなり、目の前に細長い光が現れたと思ったら人の姿を形成した。

身体のラインがくつきりとわかる、ダークブルーのウエットスーツのような服を着た人が立っている。

なにもない世界に立っているというのも変かもしれないけれど、確かに見える、というのかわかるのだ。

なんて表現していいのか、もどかしい。

「幻影だよ。君の魂に直接映像を送って見せている」

嘘っぱいほどバランスが良すぎる体型をした青年の口が動くと同じ時に声が伝わってきた。

あつ、あああ・あゝん？

わたしはしばらく言葉を失っていた。

といつても、さつきからしゃべっちゃいないんだけれど、まあ、思考能力もしばらくフリーズしちゃったってとこかな？

『そつえば、イオ、だっけ？ あんた自分のこと美化しすぎてるんじゃないの？』

太陽の日差しと見間違えそうなほどに明るい金髪が、肩を少し通り過ぎた辺りまで緩やかな螺旋を描いて伸びている。

地球上のどんなに美しい海よりも透き通った青い瞳。

これはまさしく御伽噺から抜け出てきた王子様だ。

「地球人も、俺たちの美的感覚と同じか。まあ、もとを正せば同じ遺伝子だもんな」

王子様が揺らめきだすと、今度は別の青年が現れた。

髪と瞳の色は、今、わたしの周りにある漆黒の闇のようだ。

うつん、周囲の色と同じなのになるというのも変だが浮き出して見えるってのかな？

「こっちが本当の俺」

さっきの王子様が完璧だとしたら、イオは完璧にしようとしながら遊び心が出ちゃったかなって感じ。

「さっきの王子様、捜しに地球まで来たってわけ」

『ってことは、さっきの美形キャラがこの世に存在するってわけ？でも、あんなイケメンがいたら、芸能界がほっとかないでしょ』

「肉体は惑星グランにあるから、今は誰かの肉体を借りているだろうけど」

『肉体を借りるって？』

「もともと肉体なんてただの入れ物にすぎない。だから、宇宙へ

出るときは肉体と魂を切り離して、魂だけで宇宙旅行をする。肉体は現地調達すればいいしね。まあ、宇宙へ出る時は肉体への影響をいちいち考えるより、魂だけの方がよっぽど安全というものさ。肉体を捨てたおかげで、宇宙開発は飛躍的に進歩した。それでこんな辺鄙な所にある太陽系にまで短時間でこられるようになったんだ。まあ、理論上は宇宙の終わりまでいけるはずだけど、まだだれも行ったことはないけどね」

『ふう〜ん。でも、何でこんなところにいるのよ』

「仲間と二人で王子様を追って地球まで来たんだけど、ちょっとしたトラブルがあって、緊急避難的にこの空間に潜り込んだんだ」

『潜り込んだって、ここトイレよ。それに仲間はどうしたのよ?』

「たぶん……」

一瞬、長い金髪に透き通るような白い肌の女性が目の前に現れて消えた。

なぜか胸が締めつけられるように苦しくなった。

「あいつ、必ず生きているよ、この近くで」

まるで、彼は自分で自分に言い聞かせるように呟いた。

「王子様とお姫様は、必ずハッピーエンドで終わらなくっちゃいけないんだろ、この星の御伽噺では」

彼はちよっぴり苦笑いをする。

白馬の王子様を思い出しながらも、時折いたずらっ子のような表情を見せる目の前の彼から、なぜか目を放すことが出来ずにいた。

わたしはこっち方が好みかな。

「サンキュウ」

ゲッ！ あいつ、わたしの心を読めるんだっけ。

それって、すっごくまずいじゃん。

イオはわたしの思いを完全に無視して話を始めた。

「仲間をみつけるために、一刻も早く肉体に入らなくてはならない。魂だけでは、さすがの俺も身動きがとれないからね」

『肉体って、まさか』

「そう、きみの」

『ちょっとまって！ そんなの困る。 よそ、あたってくんない』

「俺って特異体質だから、だれでもいいってわけじゃないんだ。今まで待って、きみしかいなかったのだから……」

いつの間にか、彼の美しい顔が目の前に迫っていた。　　なんだか、心臓がドキドキする。

「これ以上、選り好みしている時間がないんだ」

『選り好みって何よ！ わたしの身体になんか文句あるわけ！』

「いや、そういうわけじゃなくって」

『じゃ、なによ！』

「ああ、めんどくさい。 もう、勝手に入るよ。 きみはここでま
つてて」

『ちよつと、こんな所にわたし一人置いてくき。 まってるあいだ
に、気狂っちゃうよ』

「もう、ごちゃごちゃうるさいなあ。 ならしょうがない、一緒に行
くよ」

『まっ、まって、まってたら、うあー！』

急に抱きかかえられたように、ふわりと身体が宙に浮いたような
感じがして意識が遠のいた。

消毒の匂いが鼻をついた。

この匂いは……保健室？

意識が戻ったとき、恐る恐るわたしは目をあけた。

目の前にあったのは、沙羅と良の心配顔だった。

沙羅は今にも泣き出しそうな顔をしている。

良と目が合ったとき、彼女は慌て顔をそむけた。

「よかった」

大きな眼に涙を溜めた沙羅が、わたしに抱きついた。

「死んじゃうのかと思ったんだもん」

お、重い。

今までのふわふわとつかみどころの無い感覚の世界から、いきなり自分と沙羅の体重を感じたものだからまるで天井に押し潰されたように重い。

「ぐ、ぐるじい、本当に死んじゃう」

「あつ、ごめんなさい!」

沙羅が飛びのく。

わたしはゆっくりと身体を起こした。

「痛い!」

トイレでお尻を思いっきりぶつけたのを思い出した。

あれって、夢だったんだ。

ほっとしたような、なんだかちょっぴり淋しいような気がした。

だって、普通、宇宙人なんかに出会うなんてありえないでしょ、その上、その宇宙人がたこ型でもグレイでもなくって美形だなんて絶対ないもんね。

少し残念かな？

『残念がってくれるの？ うれしいなあ〜』

「ぐえ！」

突然の声、いや、テレパシーに驚いて奇声を発してしまった。

「どうしたの？ 伊緒乃ちゃん？」

「なんでもない」

わたしは二人に聞こえないように細心の注意を払って、口に手をやり小声であいつに言った。

「どこにいるのよ」

『声なんか出さなくても聞こえるよ』

まだわたし、夢の中にいるんだ。 夢よ、覚めろ、覚めろ、覚めろ！

『夢なんかじゃないよ。俺はきみの身体の中にいる』

身体の中にいるって言われても……。

『こついうこと』

わたしの手が、勝手に動くと自分の胸を触った。

「わあー！」

わたしは大声を上げた。

それと同時に、良の切れ長の眼と、もともと大きな沙羅の眼が、飛び出さんがほどに見開かれたと思ったら、次の瞬間眉間にしわを寄せた細い目になった。

その間もわたしの手が、勝手に自分の胸をもみもみしている。

「こら！ やめろ！」

わたしの声に反応して、手はピタッと止まった。

沙羅の眼に再び涙がにじんできた。

「かわいそう、伊緒乃ちゃん。頭打っておかしくなっちゃったの。でも大丈夫、心配しないで、伊緒乃ちゃんが変態になってもわたしたちお友だちだもんね」

沙羅がわたしの手をそつと両手で包む。

「ほら、良ちゃんも」

「あたいは一匹狼だ、こんなやつ、だちなんかじゃねえ！」

一匹狼、これが良の口癖だ。

そのくせ沙羅と幼稚園来の幼馴染だというのだ。

この、どう見ても不釣り合いな二人の仲がいいというのは、七不思議の一つかもしれない。

「そんなこといわないの」

沙羅は良の手を引っ張ってわたしの手に重ねた。

そつぽを向いている不良の良と、お人形さんみたいに可愛い沙羅、そしてごくごく普通の（いや、ちょっと地味かな？）高校生のわたし、傍目にはどう映るのだろう。

普通の友達じゃないよね。

それから、わたしとイオと名乗るエイリアンの関係は、なんていえないんだろう？

家主と店子、大家と居候？

まあ、いずれにしてもこんな話、だれもまともに取り合ってはくれないだろう。

第一話：へんてこな居候（後書き）

初めての投稿ですごく緊張しています。

書いては直し、書いては直しなかなかはかどりませんが、なんとか最後までがんばります。

みなさまのご感想が聞けたら光栄です。

第二話：はた迷惑なあいつ 1

あいつ、イオに出会ってから一週間、最悪の日々が続いた。

生傷や痣が絶えないのである。

ズル、ガラガラ、ドテ！

「いてえー！」

ふうう、またやってしまった。

『バーカ！ 風呂場で眠つむるやつがいるかよ』

『だれもやりたくってやってるわけじゃないわよ！ いったいだれのせいだと思ってるのよ。あんたのせいよ、あんたの！ まったく、イオのせいで傷だらけよ。この白くて美しい肌に跡でも残ったら、どう責任とってくれるのよ』

家の脱衣場とお風呂場には、父親の悪趣味でバカでかい鏡がある。

鏡の前で筋肉お宅の父がポーズをとって、鍛え上げた身体に惚れ惚れしている姿など想像するだけでぞつとする。

そして、この鏡があるばかりに、わたしは服の脱ぎ着も風呂に入る時も目を閉じていなくてはならないのだ。

あいつに見られないために。

なんたつて、わたしの見ている景色は、あいつに丸見えなのだから。

『誰もわざわざ寸胴なおまえの裸なんか見るかよ。ひょうたん見るほうがよっぽど感じるぜ』

『な、なんですって！ 見たことも無いくせに！』

「あーっ！」

痛いお尻をなでながら立ち上がった拍子に目を開けてしまったその先には、無駄に大きく少しの曇りもない鏡があった。

驚きのあまり、数秒間目を閉じるまで時間がかかってしまった。

『見たなあ』

『さっきの言葉は訂正するよ。寸胴ではなくって洋ナシだ』

『はあ？』

『胸がないのに腹が出ている』

『失礼な！』

いちいち頭に来るやつだ。

人の裸をただで見ているながら嫌味を言う。

反論できないところがますます気に入らない。

そう、このお風呂が怪我の絶えない理由の一つであった。

そして、二つ目の理由があんちきしょうの妙な正義感だ。

わたしは今まで“めんどろな事はしない”“人とは深くかわらない”“熱くならない”この三つをモットーに生きてきた。

それが、世の中を上手く渡っていくコツだと思っていたから。

なのに、なのにだ、高校に入って沙羅に出会ってからというもの、この三つのモットーを破ることが多くなった。

だいたい、このモットーを破ってろくなことがあったためしがない。

あの時だって、あんなに熱くなってトイレのドアをあけさえしなければ、イオなんていう変な宇宙人を自分の身体に居候させなくても済んだのだ。

そうすれば、あいつの正義感のために絶えまない筋肉痛や生傷にさいなまれなくってもよかったわけで。

だいたい、なんでポイ捨てをする人や女性に絡む酔っ払い達を注意するたびに、いちいち喧嘩になるんだかまったくわけがわからない。

そう、イオが来てからというもの、ろくな日がないのである。

明日はどうか平穏無事に過ごせますように。

第二話：はた迷惑なあいつ 2（前書き）

改訂といいますが、抜けていた文字を一文足しただけです。

第二話：はた迷惑なあいつ 2

教室の隅に置かれたゴミ箱は、いつものようにテトラパックや紙くずでいっぱいになり、その周辺には投げつけられたようにごみが散乱している。

わたしは、もうこれ以上入らなくなったゴミ箱を、一度空にしてから掃除を始めた。

掃除当番は、班ごとに交代でいろいろなところが回ってくる。

でも、ほとんどの生徒は当番などやらない。

わたしの班もわたし以外誰一人として掃除をしない。

「なに掃除なんかやってるの」

机に座ったまま仲間とおしゃべりをしていたクラスメイトが、そばを掃いていたわたしに声をかける。

「じゃ、だれがやるのよ」

不愉快な気分になった。

『へー、以外、伊緒乃ちゃんいおのはめんどろなことはしない主義じゃないの？』

イオのやつが人の神経を逆なでする。

「うるさい！」

わたしの大声にクラス中が静まり返った。

わたしは背中を曲げて、ほうきを掃いていた姿勢をさらに小さくしてごみを掃き続けた。

『決まりごとはきちんと果たす、それが嫌だったら規則を改正するぐらいのことをやんなきゃ。それもせず、守んないのは嫌いなもの。それに、人との変なかかわりをもたないためにも規則は守った方がいい』

『それなら、みんなにも守ってもらった方がいいと思うけど』

『そりゃそうだけど、そんなの無理だよ』

『そうかな、あの良でさえ掃除にいつているだろ』

『まあね。ただあれは、わたしのまねをしている沙羅さらかに付き合っているだけだし』

そう心の中でイオと会話しながらも、良が引きずるようなスカートをたくし上げてトイレ掃除をしている姿を思い浮かべると、思わず吹き出してしまった。

わたしの口を勢いよく飛び出したつばが、目の前のながく伸びたズボンにくっついた。

恐る恐る顔を上げるとはるか上空に無表情な顔があった。

「じ、ごめんなさい」

百九十センチ、格闘家ばりに体格のいい男子が立っていた。彼は鞆を持つとなにも無かったように教室を出て行くとする。

「ちょっと待てよ」

イオの声に彼が止まる。

「掃除当番だろ」

『なにいつてんのよ、イオ!』

「掃除しろよ」

『イオ、大友くんを挑発しないでよ』

わたしは慌ててイオを止めに入った、無論、心の中でだ。

大友くんはやくざの組のナンバーツーを父親に持つと噂されている。

先生さえ彼には、なにも注意をしない。

というか、取り立てて悪いことをするわけでもないから、彼を注意する理由もないのだけれど。

クラスメイトはやくざの息子という以前に、彼のいかつい容姿やどこか人を寄せ付けない雰囲気から、だれ一人としてかわりをもとうとはしない。

その彼にイオは意見しているのである。教室中の生徒がわたしたちの様子に無関心を装いながら聞き耳を立てている。

「はい、箒と塵取り」

イオは、わたしがもっていた掃除道具を渡そうと彼の目の前に差し出した。

見下ろしている大友くんの顔を下からまじまじと見上げた。

大きくも無く小さくも無いほどよい大きさの眼、てごろな高さの整った鼻、少し大きめのぷっくりとした口。

彼って、こんな顔してたんだ。

近寄りがたいイメージとは少し違った顔だった。

普通に見れば、イケてるぶるいかもしれない。

意外と人の顔なんてよく見ていないものだな。

彼は目を瞬たせると、わたしに背を向けて歩き出そうとした。

立ち去ろうとしている大友くんの後姿を見ながら、ほっとしたのも束の間。

「聞こえないのかよ」

挑発するようなイオの声。

それでも、無視をして行こうとする彼の腕をイオはつかんだ。

「もう掃き終ったからさ、これ片付けてくれるぐらいいいんじゃないの？」

イオは彼の手に箒と塵取りを持たせると、ごみ箱のごみを捨てに教室を出た。

わたしが教室に戻ったときには、大友くんも箒や塵取りも消えていた。

「伊緒乃ちゃん、大友くんに塵取りを片付けさせちゃったんだって、すっごーい！ 見てみたかったな、大友くんが塵取り抱えているところ」

後方より甘ったるい声がする。

「ねえくん、一緒に帰ろう、うふ」

わたしの背中に沙羅が抱きついてくる。

「ごめん、先に帰ってくれ」

「えー、また一緒に帰らないの？ 最近、伊緒乃ちゃん付き合い悪すぎ」

どういうわけか入学してすぐに沙羅とは友達になった、というよ

りも沙羅になつかれたという方が正しいかもしれない。

いつもならこんなときは振りほどくところなのだが、今日は違う。
今はあいつ、イオがわたしの身体を動かしているのだ。

きつと沙羅の水ヨーヨーのように軟らかい胸の感触を背中に感じて、おもいつきり鼻の下を伸ばしているに違いない。

イオは妙に人間臭い、わたしの思い描いていた宇宙人のイメージとはほど遠い。

「いつまでそうしてるきだ、は・な・れ・ろーっ!」

平均身長^{ウチ}のわたしとちょっと背の低い沙羅を、背の高い良^{ウチ}が引き離れた。

「それじゃあ、バーイ!」

そう言つとイオは駆け出した、もちろんわたしの身体、でも今はあいつが支配している。

イオの行き先はわかっている、体育館だ。

お目当ては体育館の片隅で練習している剣道部。

女子二名と男子四名の淋しい部だ。

古くからある部ということで、同好会への格下げをかるうじて免

れている。

これ以上部員が減ったら、来年あたりは同好会になっているかもしれない。

まあ、そんな他人の部の内情はどうでもいいのだが、肝心なのはイオがこの部にえらく執着しているという事実だ。

最初は剣道という日本古来の武道が、物珍しくて見ているだけだと思っていた。

だがしばらくして、イオが見ているのは特定一男子部員だと気がついた。

わたしより一つ上の二年生、ひろせ ゆうき 広瀬祐樹。

先輩を見ているとなんだか切ないような苦しくなるような、心臓がスキップするような変な感覚になる。

先輩とは話したこともないのに。

これはたぶん、イオの感情と同調しているだけなのだろう。

広瀬先輩は、体育館にたった一人になると雑巾がけを始める。

これが日課だ。

今日は、イオも彼に習って雑巾がけを始めた。

イオったら、なにを考えているんだか。

ほんの一瞬、先輩はわたしを見たがなにことも無かったように雑巾がけを続ける。

体育館にふたりつきり。

イオは雑巾がけを一往復しただけでわたしにバトンタッチした。

だだっ広い床の真ん中に、水で輝くラインを一本引いただけで、わたしはリタイヤしたい気分だった。

『かわつてよ』

くっそー！ 無視して！

先輩はもうかなり拭き終わっている。

休んでいるわけにもいかず、再び重たいお尻をあげた。

日頃の運動不足がたたる。

『ざあけんじゃねえ！ やってられつかこんなこと！』

疲れが脳にまでやってきて、言葉遣い、いや、考える言葉が乱暴になってくる。

やっと、過酷な筋トレ？ が終わり体育館すぐ横の流しに先輩と並んで雑巾を洗った。

雑巾を洗い終わると、先輩は手をだした。

その意味がわからず、わたしはただ突っ立っていた。

「雑巾」

さわやかなミントの香りが漂ってくるみたいな声。

わたしに代わってイオが雑巾を渡した。

「今日はどうもありがとう」

まじかで先輩を見たのは初めてだし、こんなに優しい声を聞くのも。

いつもは、離れた所から眺めているだけで、ううん、そうじゃない、イオはテレパシーを送っているみたいだったけど。

「この頃、毎日練習を見に来ているけど、剣道好きなの？」

きりりと引かれた目元が、なんだかぞくつとしちゃう。

「いいえ、べつに」

イオのそっけない返事。

少し傾げた先輩の髪から滴り落ちそうな汗のしずくが、夕日色に染まって見えた。

わたしたちの影が長く伸びていくばかりで言葉が続かない。

なにかいわなくっちゃと、わたしは乾ききった唇をひらいた。

「あの、なぜ、先輩はいつも一人で掃除をしているのですか？ 他
の部ってみんな後輩にやらせるのでしょ」

「使った場所に対して感謝をこめて、っていうとかっこいいけど、
自分のため、かな？ 最初と最後には雑巾掛けをしないとなんか落
ち着かなくってさ」

照れ笑いをする。

稽古をしている時の凛々しさとは違って、なんか可愛い。

「明日、きみも練習に出てみない？」

「とんでもない、わたし運動音痴ですから」

「やってみると楽しいよ。それに、俺も……仲間が多いほうが楽し
いし」

「遠慮しておきます。見ているだけで十分楽しいですから」

「そう」

先輩がこっちを見ている。

まただ、胸が締め付けられるように痛くて、呼吸が出来ないくら
い苦しい。

「じゃあ、今日はこれで」

そのひとことがやっとで、
息苦しいのも忘れてわたしは駆け出して
いた。

第三話：賭けられたファースト・キス 1

朝、教室に入るといつも以上に騒がしかった。

特に女子たちがざわついている。

「ねえ、聞いた」

「新しい担任、今日からでしょ？」

「イケメンだって！」

そんな話し声が、あちらこちらから聞こえてくる。

チャイムが鳴ると、みんな慌てて席についた。

そして、前のドアがひらくとスーツを着た男性が入ってきた。

みんなが浮き足立っていたのも頷ける。

中央まで来ると黒板に九条龍之介と書いた。

「今日から山川先生に代わって、きみたちの担任になりました“くじょう、りゅうのすけ”です。よろしく」

九条と名乗る男性が教壇に立ってこちらに振り向いたとき、どこかで会ったそんな気がした。

教室中が静まり返っている。

すべてのクラスメートが、九条先生のあまりに浮世離れして整いすぎた姿かたちに目を奪われたからだ。

どこかで。

こんな美形を忘れるはずはないのに、思い出せない。

先生と眼があった瞬間、ほんの一瞬だったが先生が眉間に皺を寄せたように見えた。

『そうだ、あの子の人に似ていると思わない？』

わたしはわたしの中のイオに問いかけた。

そう、イオに初めて会ったとき、イオは九条先生に似た人の映像をわたしに見せた。

あの美しい男性はブルーの瞳に金髪だった。九条先生は黒髪に黒い瞳、どう見ても日本人だけど、確かに似ている。

『ねえ、イオ』

イオはなにも返事をしない。

「……のちゃん、ねえったら」

前の席の沙羅が振り向いて、わたしの机の上に両肘をつき手のひ

らの上に頭をちょこんと乗せてわたしを見ていた。

いつの間にか朝のホームルームも終わり、新しい先生はいなくなっていた。

「あつ」

「ぼくとしちゃって、どうしたの？ 伊緒乃ちゃんも先生に見とれちゃってたの？」

「ち、ちがうって」

「伊緒乃ちゃんたら気多いんだから。伊緒乃ちゃんには沙羅がいるんだから浮気しちゃだめでしょ」

沙羅はぶつくらとした赤ちゃんのような手で、包み込むようにわたしの手を握り締めた。

その手を引き離す大きな手があった。

「良ちゃんたら邪魔しないで」

「伊緒乃には剣道部がいる。その上、新しい教師にまでうつつを抜かすような浮気者は、沙羅に手を出す資格はない！」

「剣道部って、広瀬先輩？ 先輩も先生も関係ないと思うけど。それに、沙羅に手をだすなんて気、さらさら無いから」

「沙羅、てえくだして欲しい！」

「伊緒乃は剣道部のことが好きなんだ」

二の句が継げなかった。

考えてもみなかったからだ。

第三話：賭けられたファースト・キス 1（後書き）

ここまで読んでいただいております。ありがとうございます。

一応、全体の1／3程度までやってきました。

書きあがってはいいても、ああしたほうがいいかなこうしたほうがいいかなと悩んでばかりです。

ほかの小説たちも書きあがっては直してしまい、とりとめもなくなくなってしまう。

こんな私の相談にのってくれるという、奇特な方がいらしたらご連絡ください。

第三話：賭けられたファースト・キス 2

たしかに傍から見れば、わたしが広瀬先輩に気があるように取れる。

毎日毎日剣道部の稽古に通いつめて、普通だったらそう思うよね。

でも、通っていたのはイオなのだ。

そして、イオが見つめていたのは広瀬先輩。

そういえば、先輩を見ているとわたしの心臓は全力疾走したあとみたいだ。

ひょっとしてあれが恋のときめきっていつやつ?!

あ、あれはイオの心に同調しているだけで。

じゃあ、あいつが先輩に恋しちゃってるの?

まさかあ、あいつは男だし、先輩も男。

もしかしたらイオは女?

イオはエイリアンだから地球の常識は当てはまらないのかもしれない。

いや、エイリアン自体に男と女の区別があるかどうかも分からない。

えっ、どうなってるの？

わたしの頭の中を止めどもない疑問が猛スピードで駆け巡っているなか、良の声が聞こえてきた。

「で、剣道部とはどうなってるんだ？ 告白したのか？」

「えっ、沙羅、そんなの許さない！ 伊緒乃ちゃんが、男の人と手つないだりキスしたり、あんなことしたりこんなことしたり ？ \$ % & # ！！ なんて絶対いやだもっん！！」

「なんでそういう話になるの！」

慌てて二人の会話を断ち切ろうとした。

放っておいたら、二人の妄想はますますエスカレートするに違いない。

「まあ、あたしとしちゃ、剣道部と伊緒乃が上手くいつてくれた方がいいんだけど。でも、まあ、無理だね。こんな、色気もなにも無い女に、男が寄ってくるわけがないって」

「そっか、沙羅あんしん」

「伊緒乃には初体験どころか、ファースト・キスさえ千年経っても無理ってところか」

なんで良は、こんな内容の会話でも事務的にしゃべるんだ！

「わゝ、よかった。あ、でも、千年経ってキスしちゃったら、沙羅、いやゝん！」

「ちよつと待った。それじゃあ、わたしがちつとももてないみたいじゃないの」

「違う？」

良がさりとかわした。

「なによ、男の一人や二人、キスのひとつやふたつ」

「ひとつやふたつねえ」

良の人を馬鹿にしたような物言いが、わたしの神経を逆なでする。

「じゃあさ、賭けない？」

「望むところだ！」

勢いに任せて賭けに応じてしまっただけから後悔した。

これって、いつものパターンにはまっているみたい。

“あかずの廁”のときと同じだ。

そう、あの時点で、もつと冷静になっていたら、今みたいな最悪の事態にいたらなかったはずだ。妙な宇宙人がわたしの身体に居候するなんて、非現実的な

状況に。

そんなわたしの思いをよそに、良は勝手に話を進める。

「一週間以内に伊緒乃が剣道部とキスをする」

「えーっ！」

「そんなのダメ！　沙羅が許さないもん！」

「どうせできっこないんだから、沙羅は心配しなくたって大丈夫だ」

「あつ、そうか」

沙羅のやつ、簡単に納得するなっていうんだ。

なんか、当たっているだけに虚しいじゃないか。

「一週間後には、沙羅の大好きなジャンボ苺パフェが食べられるぞ」

「やったあ！　どうせ、伊緒乃ちゃんにキスなんて出来るはずないものね。先輩つてもてるの」

に誰とも付き合わないんですよ。　だったら伊緒乃ちゃんを好きになる、な～んてありえないもんね」

「ただ、この惑星には“夢食う虫もすぎずき”ということわざもある」

「なにそれ」

「もう、二人してわたしのことばかりして。 やりやあいいでしょ。 やってやろうじゃん、キスだろうが接吻だろうが！」

「あの、お取り込み中、大変申し訳ございませんが、そろそろ授業を始めてもよろしいでしょうか？」

いつの間にか古文の中森先生が目の前に立っていた。

クラス中が嘲笑の渦に巻き込まれた。

わたしはまるで南極の氷の海に飛び込んだ気分だった。

ペンギンになりたい。

『バーカ』

イオの言葉がわたしの身体の中に空しく響き渡った。

第三話：賭けられたファースト・キス 3

我が校のトイレは、東階段の横が男子専用なら西階段横は女子専用という具合になっているんです。

さらによくないことに、階ごとに男女が逆だなんて。

だいたい、校舎なんてコンクリートの四角い入れ物、どの階もまったく同じ造りなんだから始末におえない。

まさに、今日は、悪条件が重なった。

一つ、家庭科の授業で、自分のクラスの真上にある家庭科室に来ていたということ。

二つ、家庭科室にいたのを忘れて、始業チャイムの鳴る間に慌ててトイレに行ったこと。

よって、自分の教室にいと勘違いしたわたしは、駆け下りる必要もなかった階段を大急ぎで駆け下り、思い切りドアをあけてしまったのです。

開いたドアの向こうに広がる男子用の便器の列。

人影。

急いでこの場を立ち去ろうとしたけど、時すでにおそしドアは閉じられていた。

「浅田さん」

聞き覚えのある声の方に視線を向けると、それは広瀬先輩だった。

「あつ、すみません！ あの、何も見てませんから」

なにいつてるんだ、わたししたら。

思い起こせば三ヶ月前、入学式にも同じドジをした。

あの頃は右も左もわからない校舎で、男女一緒なのかと思ったのだ。

「二度目だね、トイレで会った」

「えっ？」

あの時いたのも先輩だったの？！

う、うそー！ ありえない！！

「浅田さんて男だったの？」

「いえ、あの、そのー」

なんとなくかえしたらよいのかわからないセリフに戸惑った。

その上、沙羅と良の賭けを思い出して、ますます顔が火照ってくる。

「あははは、冗談だよ、冗談」

「先輩でも冗談いんですか？」

「俺だつて冗談くらいいうさ。食事もすればトイレにもいくし、寝たりもする。アイドルじゃないからね」

「えーっ！ 寝るって女の人と」

いってしまつてから後悔した。

居候のイオが来てから、あいつの変態的思考がわたしにうつってきたみたいだ。

ただでさえ、穴があったら入りたいって心境なのに。

こんなことなら、イオとであったトイレの空間に残ってたほうがよかった。

「す、すみません！ 失礼します」

頭を深く下げるとトイレを飛び出した。

おんぼろ自動車ででこぼこ道を走っているかのように、身体中が小刻みに揺れ続けていた。

よつて、そのあとの家庭科の授業など、まともに受けられるはずもなかった。

第四話：三角関係！？ 1

九条先生が剣道部の顧問になってからというもの、部活時の見学者が急増した。

やっぱり、なんかかんやいっても人は見かけに弱い。

なんてったって、九条先生の容姿に関しては、非の打ち所がないのだから。

その上、達者な口の御蔭で女子だけではなく男子にも人気がある。

とはいっても、さすがに部活まで押しかけてくる男子はいないんだけど。

わたしは、女生徒たち（あつ、女教師もちらほら混じって）に、占領された体育館のドアから少し離れた位置にいた。

だって、ああいう輪の中に入っていくのには、すこし抵抗があるもんね。

それに、こうやって彼女たちの後ろから様子を見てみると、だれがだれのファンだか手に取るようにわかる。

なんかおもしろい。

今までは見かけなかった広瀬先輩のファンも、九条先生のファンに紛れて見学に現れるようになっていた。

沙羅がいつていたように先輩のファンも意外に多い。

以前は先輩が嫌がるから見学者がいなかっただけのようだ。

先生の洋酒の入ったスイーツみたいにとろけそうな大人の甘い雰囲気とは対照的に、なんといっても先輩の胴着姿は凜然としてかっこいいもんね。日本男児って感じ。

それにしても、九条先生が現れてからというものの、イオはなんだかおかしい。

『俺はおかしくねえ!』

こついうところが、あいつはガキだ。

自分の感情を認めようとしない。

そういえば、いったいいくつなんだ、イオのやつ。

『十九、おまえより年上だ、少しは年長者を敬うって気持ちがないのか地球人には』

『なによ、イオの歳なんて今はじめて知ったんじゃない』

『伊緒乃が訊かなかったからだ』

そんなのへりくつじゃない。まったく、そういうところがガキだつていうのよ。

『うるさい!』

それにしても納得がいかない。

なぜわたしの考えはイオに筒抜けなのに、イオの考えはわたしにはわからないのかって。

あいつがわたしに伝えようとしたときだけ、言葉としてわかるというのは凄く不公平だと思う。

だって、わたしはこの身体の正当な持ち主なのだ。

なのに居候であるあいつの方が主導権を持っているというのは絶対におかしい。

といっても、あいつの感情だけは時々固いガードを破って漏れてくる。

いらだっているとか、不機嫌だとか、そんな雰囲気伝わってくるだけけど。

とくに九条先生と広瀬先輩に対するとき。

『ねえ、イオ。九条先生ってイオの探している人でしょ？』

以前答えてもらえなかった問いをイオにかけた。

『初めてイオに会ったとき、見せてくれた王子様が九条先生なんですよ』

『ああ』

『でも、本人の身体じゃないんだよね』

『ああ』

『だったら、なぜ王子様と同じような顔をしているの？』

『思うように変えられるのさ』

『イオの星の人は思うだけで肉体まで変えられちゃうの？』

『ある程度は。人間だって、性格が顔に出るっていうだろ』

『まあね。でも、それって多少変わる程度で別人にはなれないもの。選んだ地球人が元々似ていたっていうのならわかるけど、そんなのってありそうにないし。それに本人びっくりしちゃうよね、自分の顔が急に変わっちゃったりしたら。あつ、その前に変な宇宙人が入ってきちゃったほうが驚くか』

イオは黙り込んでいる。

こんなとき、相手の顔が見えないっていうのはよけい気まずい。

相手の表情からうかがい知ることができないのだから。

『乗っ取ったんだ』

『乗っ取るって、乗り物じゃないんだよ。心のある人間だよ』

『もとの持ち主の魂を追いついてこと。つまり』

あとの言葉を待ったが、続かなかった。

『そうだ、イオがわたしをトイレに置き去りにしようとしたのと同じことをしたんだ』

『たぶんそうじゃない、あいつのことだから』

なんだか怖くって、それ以上聞くことも出来なかった。

まるで、自分の未来を聞いてしまうようで。

地球人の常識なんて彼らには通じない。

どんな卑劣な手を使うかわからない。

いや、地球人のほうが、もっと悪いことをしているのかもしれないけど。

第四話：三角関係！？ 1（後書き）

アクセス数に一喜一憂しながら、それを励みに書いています。
これからもよろしくお願いします。

第四話：三角関係！？ 2

誰もいなくなった教室に戻って、しばらくにも考えずにいた。

なにか考えたりしたら、自分のいまの立場がすごくあやふやで不安で怖くって。

廊下から、はしゃぐ男子の声とともに走り回る足音やボールのぼんやりとした音が近づいてくる。

『ねえ、イオ、探していた人が見つかったのになぜ話し掛けないの。これからどうするの？』

『さあ』

『さあって』

『まずレナの記憶が戻ってからかな』

『レナと一緒に来たっていう仲間？』

『ああ』

『記憶がないって……どの人がレナかわかってるってこと？』

ガラスの割れる音が響いた。

緩慢な動作でイスから立ち上がると廊下へ出た。

そこには、遠く階段を駆け下りる靴音だけを残して、すでにだれもいなかった。

床には割れた窓ガラスが散ばっている。

ほうきで掃き集めたガラスを、ちぎったマンガ本の上に乗せた。

窓枠に残っていたかけらを取ると指先に痛みが走った。

わたしもそのうち、地球人の九条先生みたいに乗っ取られちゃうのかな？

今も乗っ取られているのとあんまり変わらない気がするけど、イオが いいよ どん だ っ て 事 件

は、本当の九条先生はもうこの世には……。

いない。

人差し指にずっと伸びた切り傷が、血で赤い線に変わった。

なんだか、この赤い血が、まだ自分が人間であることの証であるような気がした。

ティッシュで傷口を押えると保健室へ向かった。

保健室のドアの窓からは明かりが漏れている。

窓越しに、九条先生と肩に包帯を巻いた上半身裸の男子の後姿が見える。

先生は男子の座っていたイスの背もたれに手を掛けると、彼の額にかかった髪をかき上げる。

中に入って絆創膏をもらっただけなのに、なぜかそれができない。

なんだか、見てはいけないシーンを見てしまったような気がしたから。

あの後姿は、広瀬先輩だ。

『レナ』

今のは先生のテレパシー、話してはいない。

『私を捜しに来てくれたのでしょ、レナ』

先生の手が先輩の頬に触れる。

『レナ』

『レナ？』

広瀬先輩の唇がかすかに動く。

『そう、あなたの名前。そして、私はアール』

「アール」

イオがいるせいか、人の考えが時々わかってしまう。

まして、テレパシーならなんの障害もなく聞こえてくる。

『レナは私の恋人』

いつの間にか力をこめて握っていた傷口が、ドクドクと早く波打ち始めたのを感じた。

第四話：三角関係！？ 3

気づくと、わたしは家に向かって歩いていった。

小さな公園にさしかかると、騒ぎ声が聞こえてくる。

薄暗くなり始めた公園内にある切れかかった街灯の下で、制服を着た三人の

男子高校生が、タバコを吸いながらふざけあっている。

今までのわたしなら、見て見ぬふりを決め込んでいた。

それが今の日本にあつては最善の方法なのだから。

でも、最近は違う。

イオがわたしの身体を占領しているからだ。

あいつには妙な正義感がある。

その上、今は虫の居所が悪い。

なにやら、イオとレナとアールの三人の間には複雑な事情がありそうだ。

わたしはといえば、広瀬先輩と九条先生のあるシーンを見てしまったショックから立ち直れないでいる。

なんでわたしがこんなに落ち込まなくてはいけないのだ。

先輩とわたしは、なんの関係もないのだから。

それに、あれは、先輩ではなく、身体を支配していたのはきっとレナだったのだから。

足元に吸殻の散乱している不良たちの側まで来ると、イオがどすの利いた声をあげた。

「拾えよ！」

まあ、普通の女子高生のわたしがしゃべるのだからたかが知れている。

しゃがみ込んでいた不良が、微妙に時間をずらして立ち上がった。

一人がタバコをくわえたままわたしの前に来ると、それを吐き捨てた。

「肺ガンでおまえらが早死にするのは勝手だが、地球を汚すのは許せねえ」

いつものイオの決め台詞である。

大抵ここで一瞬相手は引くのである。

そして、ほとんどの人間が同じようなセリフを吐く。

「けっ！ 気狂いかよ。 邪魔だからさっさと帰れ！」

「そこに散らかつている吸殻を片付けてくれたら、帰るよ」

不良たちは、イオの言葉を見殺ししてなおもタバコを吸い続ける。

「片付けろよ」

「うるせえな！」

不良の一人がイオの胸を小突いた。

「手を出したな。だったら、こっちもいかせてもらっぜ」

言葉と一緒にイオの左手のパンチが不良の腹に入る。

彼は息も出来ずにその場にかがみ込んだ。

別の一人がいきなり繰り出した拳を、イオは寸前のところで避ける。

その後、続けざまに飛び出してくる鉄拳をらくらくとイオはかわしていく。

なんだかかわしたのちにイオの右手によるアッパーカットが決まった。

だけど、これはかなり力を抜いている。

これまでの経験上、イオは左利きである、なのに右手を出したのは相手を一撃で

ノックアウトしないためだ。

数えきれないほどの膝蹴りが相手の胃袋めがけて入った。

さらに、なんどもなんども相手の腹めがけて軽いパンチを繰り返している。

手加減しているのって、相手のためっていうより、自分の憂さ晴らしのために相手をなぶりものにしていてとしか考えられない。

初めてイオを怖いと思った。

今までも、イオに自分の身体を取られるのではないかという不安はあった。

けど、決してイオに恐怖は感じなかった。

あいつが、わけもなく人を傷つけるようなやつではないって感じていたから。

今までにも幾度となく不良や悪人？をやっつけてきた。

でも、今日はいつもと違う。

普段は悪に対する戒め、相手を改心させようという気持ちだけだった。

なのに今は、暴力という行為を楽しんでいるようだ。

わたしは自分の身体だというのにその残虐な行動を止めることが

できない。

わたし自体は運動音痴で喧嘩などしたこともない、そんなわたしの身体を使って普段喧嘩慣れしているであろう相手を、簡単に倒してしまうのである。

それほど力のあるイオの仲間たちが、もしこの地球上に沢山やって来たとしたら？

もしかしたら、イオの星の住人たちが、今現在、地球に向かっているかもしれない。

思い浮かべただけでもぞつとする。

ふとわたしは思った、イオに勝って欲しくないって。

こんな不良たちを勝たせるのは悔しいけど、でも、人間である彼らには負けないで欲しかった。

イオなんか負けちまえ！

三人目を殴ろうとしたイオの手が、ふと、止まった。

「このやろっ！」

相手の拳が、イオの腹にめり込んだ。

三人のうちでも一番弱そうだったが、相手も必死である。

かなり効いた。

イオの腹と言っても、彼が今は支配しているだけで本当はわたしの身体なのである。

この後、イオはなんの抵抗もしなかった。

ただ、彼らのなすがままにされていた。でも、女の子にとって大事な顔が殴られそうになる時だけは避けてくれた。

イオたちみたいに整った顔じゃないけど、やっぱり傷がついたらいやだもんね。

少しは気使ってくれてるんだ、イオのやつ。

第四話：三角関係！？ 4

彼らがいなくなった後、わたしは地面に仰向けに大の字になって転がった。

もう、すっかり暗くなった空には星が輝き始めていた。

なんか気持ちいい。

大地に寝転んで、土の香りをかぎながら星を見るなんて、なかなかいもね。

わたしの身体は、わたしの意志のもとに戻ってきていた。

なのに、痛みはまったくなかった。

きっとイオが痛みの全部を背負ってくれているのだろう。

「なぜわざと負けたの？」

な・ぜ。

聞くまでのことはない、わたしの負けてしまえと思っ心に彼は反応したのだ。

いつもは饒舌なイオが、今は黙り込んでいる。

イオの気持ちも伝わってこない。

まるで彼がいなくなってしまったのかと勘違いするぐらい。

ただ、感覚の無くなった身体だけが、いまだにわたしの中に彼が存在していることの証だった。

なんだかそれって、変な気もするが。

喧嘩をしたばかりの疲れも無いのに、起き上がることが出来なかった。

さつきまで、ジージーと耳障りな音を立てて不規則に点滅していた街灯が切れて、真っ暗になった。

暗くなった空には、いつもより少しだけ増えた星が瞬いていた。

『ねえ、イオのいた星ってどれ？』

『見えないよ』

『そんなに遠いんだ』

まあ、都会で見える星の数なんてたかが知れてるけどね。

でも、なんか、改めて宇宙の広さを感じた。

そうだよな、今までイオみたいな宇宙人が実在するなんて想像してもみなかった。

いたら面白いな、ってくらいで。

「ただ、宇宙って広いんだよね、どんな生物がいたっておかしくない。」

「レナと俺は、家同士が決めた許婚」

「えっ、でも、九条先生はレナとアールは恋人同士だって」

「そう、だからそのことがばれて、アールは地球へ追放されたんだ」

「レナにはお咎めがなかったの？」

「アールの身分は俺たちより低いから、罪を問われたのはアールだけだ。だけど、それって、なんか納得できなくて俺はレナを連れてアールを捜しに来たんだ」

「科学がいくら進歩していても、身分制度はずいぶん古めかしいのね」

「そっという地球人こそ」

「確かにそうかも、民主主義っていつていながら、いろんな特権階級がいたりして。」

「ちょっとまってよ、罪人のアールが地球へ追放されたってことは、地球は流刑地ってこと？　そうか、最近日本の治安が悪くなったのは、イオの星の罪人たちが来ているからか」

「それは、違うと思うけど」

『どうして？　だって、悪い宇宙人がいっぱい来てるんでしょ』

『いっぱいってほどは、それに極悪人は地球に来てないし……アー
ルだって悪いやつじゃない。　ただ、いけ好かないやつだけだ』

そういいながらも、なんだかイオが二人を大切に思っている気持ち
が、湧き水のように清らかにわたしの体いっぱいに溢れ出てきて
いた。

こんなにだれかに思ってもらえるなんて、ちょっぴり二人がうら
やましかった。

今まで人とは適度な間隔を持って付き合ってきたけれど、なんだ
かイオたちみたいなのもいいかって。

その時、沙羅と良の顔が浮かんで思わず頭を振ってしまった。

空には、パラパラと散らばった星が輝いていた。

第五話：キス??? 1

昨日のことがあったから、朝っぱらから担任の九条先生に会うのはきつい。

その上、一時限目から九条先生の科学である。

「どうしちゃったの？ 朝から暗い顔しちゃって」

「わっ！」

目の前に突如現れた一つ目の沙羅の顔に驚いた。

人の顔って近づきすぎると一つ目に見えるんだ。

なんだか妙なことに感心して、不覚にも沙羅の顔をしげしげと見詰めてしまった。

「きゃっ！ 恥ずかしい、そんなに見詰めちゃいやぁ〜ん」

沙羅が両手の拳を軽く握りあごに当てると身体を左右に振りながら、語尾上がりのぶりっ子の声を上げた。まあ、いつものことだが。

その横では、良がわたしを睨みつけている。

「先輩とは上手くいつてるの？」

良の言葉に反応するように、昨日の保健室の光景が脳裏にまざま

ざと甦った。

「その様子じゃ、うまくいってないね」

良の言葉が、グサツと心を刺した。

それって、自分の心だけではないような気がする。　イオの心も一緒に串刺しになっちゃったて感じ。

けさからイオは一言もしゃべらない。

だけど、わたしの中にいることだけはわかる。

だって、伝わってくるのだ、なんだかわからないけどもややもやしたようないらしたような変な感じ。

なんか、わたしの心もあいつの心に同調してしまったようだ。

「まあ、あたしはどっちに転んだっていいんだけど。　もし万が一、伊緒乃が剣道部とうまくいちまえば、それはそれで厄介払いが出来るいいしね。　でも、まあ、それは、日本沈没よりありえねえけど」

地球温暖化で断然日本沈没のほうが可能性高くなったかも。

「だめ！　良ちゃん、伊緒乃ちゃんを炊きつけるようなこといっちゃ。　伊緒乃ちゃんの性格わかってるでしょ。　もし本当に先輩と仲良くなっちゃったらどうするのよ。　そんなことになったら、沙羅もう学校に来ないから」

「だれかな？　学校に来ないなんて悲しいこと、いつているのは？」

いま一番会いたくない九条先生が白衣を着て、沙羅の後ろに立っていた。

「はい！ 沙羅です！」

勢いよく挙げた沙羅の手が先生の胸を直撃した。なんとなく、沙羅の行為には悪意があったような気がするの、わたしの思い過ぎだろうか？

先生は、沙羅の一撃に顔をゆがめたが、すぐに言葉を続けた。

「どうしてかな？」

先生は極上の笑みを浮かべて沙羅の顔を覗き込んだ。

ほかの人だったら、この微笑一つで失神してしまうかもしれない。

案の定、クラスの大半がうつとりとした目つきで見つめている。

「伊緒乃ちゃんに恋人ができたらす」

「浅田さんにはそういう人がいるのですか？」

「いません！」

わたしはあわてて否定した。

「ということですよ、^{すえなが}末永さん。安心して学校へきてくださいね」

「でもね、九条先生。伊緒乃ちゃんは、ひろ……」

「わー！先生、授業でしょ、授業」

「そうですね。ただ、一つ忠告しておきます。広瀬君はやめておいたほうがいいですよ」

耳元でささやくと、意味ありげに口元を歪め、わたしに向かってウィンクをした。

悪寒とともに女子たちの射るような視線にわたしは身震いした。

先輩の中にはレナがいて、アールの九条先生とは恋人同士。

ということとは。

でも、先輩は先輩で。

うえーん、もう、よくわかんないよ！どうすればいいのよ、わたし？

第五話：キス??? 2

わたしのファーストキスをかける、なんていうくだらない賭けをしてから七日が経とうとしている。

剣道部の部活を観にいかなくなって六日。

「わーい！今日はジャンボ苺パフェが食べられる！」

沙羅が教室の床が抜けるのではないかと思うほど続けざまにジャンプをしながら騒いでいる。

良はその様子を眺めながらボソツとわたしにつぶやいた。

「本当にそれでいいのかよ」

「いいも悪いも、ありえないし」

「ありえないとかそういう問題じゃなくて、伊緒乃自身の気持ちの問題だよ」

「気持ちの問題って？」

「好きなんだろ、剣道部のこと」

わたしが先輩を好き？

「わたしは……」

あれはただイオが毎日見に行っていたのを、二人が勘違いしただけで、好きと

か嫌いとかではなくって。

「剣道部にアタックしたのかよ」

「もう、良ちゃん、そんなこといわないの」

「沙羅はそんないいかげんな伊緒乃でいいのかよ。あたいさ、伊緒乃の単純でしかも勢いだけでなんでも乗り越えちゃうところ、すごいと思うよ」

「沙羅も伊緒乃ちゃんのそういうところ好き!」

そう仕向けているのはだれよ。本当のわたしは、めんどくさいことには目を瞑って生きてきたのだ。

「そりゃ、自分でも単純だなんて思う。賭けのことだって勢いで受けちゃってさ。でも、自分で自分がわからなくなることだってあるんだよ。広瀬先輩のことだって、かっこいいなとは思っけど本当に好きなのかわかんないし。ただ、先輩とのキスを賭けにするなんて先輩に悪くって、失礼だよなって」

「それで、最近部活を観に来なかったんだ」

振り向くといつからそこにいたのか広瀬先輩が立っていた。

「で、俺のキスの価値ってどの位?」

先輩って、こんな言い方する人だったのだろうか?

まあ、トイレの時も冗談はいつていたけれど。

「ジャンボ苺パフェ！」

沙羅が元気に返事をする。

この、能天気娘が！

「ふう〜ん、そんなもんなんだ」

なんだか、先輩の雰囲気が違う。

『まずい、同化してきたのかな？ それとも』

イオが深刻な声を出す。

『同化ってなに？』

わたしがイオとテレパシーで会話をしていたその瞬間、頬に仄かに暖かいものがかすめた。

なっ、なに、なに今の？

「こんなものでいい？」

先輩が聞くと、良は急いで答える。

「はい、そんなもんで」

沙羅は直立のまま硬直している。

「じゃ、お取り込み中のようなので、これで失礼」

「待てよ」

イオが話しに加わる。

先輩が振り向く。

「思い出したんだろ」

イオの言葉に先輩がわたしの耳元で囁く。

「大切なところ見られたってこと」

イオの平手が先輩の頬を指摘した。

先輩がイオの左手をつかむ。

「こういうとき、運動神経の良い器って便利ね」

とつさに出たわたしの右手は、見事先輩の頬に当たった。

「器なんて言わないでよ、先輩は人間なんだから」

沙羅達に聞こえないように、出て行こうとする先輩の後姿に小声で言った。

「イオはレナさんのこと、すごく大切に思っているんだよ」

「伊緒乃ちゃんを怒らすなんて、ぜったい、沙羅、絶対許さない！」

しばらく経つても、さっきの出来事が理解できずに、ただ微かに残る頬の暖かい感触を手のひらで覆っていた。

第六話：ふたりつきり 1

沙羅たちと校門を出ようとしたわたしの目に、先輩が映った。

「ちょっと聞きたいことがあるんだけど」

先輩の言葉に反応し、沙羅は上目遣いに先輩を睨みつける。

普段は愛くるしいまん丸な眼なのに、睨みつける時は普通の人以上に凄みがある。

「あのねえ！」

なにかいいかけた沙羅を、良は抱え上げた。

沙羅は懸命に足をバタつかせ抵抗を試みたが、良の力には勝てるはずも無くこの場を去っていった。

「少しいいかな？」

息苦しい。

大きく深呼吸をひとつすると、わたしは先輩の前を通り過ぎた。

「待てよ！」

早歩きのわたしの後を先輩はついてくる。

なんと深呼吸しても早くなったわたしの心臓の動きは元に戻らな

い。

「待てったら！」

先輩がわたしの腕をつかむ。

「レナって……」

わたしは横に首を振った。

「きみは知っている、そうだろ！」

大声を出してしまってから先輩は、周りの目を意識して小さな声になった。

「少しだけ話をしたい」

まるで、さっきの出来事はなかったかのような態度の先輩が少し気になって、
わたしはゆっくりうなずいた。

たぶん今は、レナではなく本当の先輩なのだ。

先輩と小さな児童公園に入った。

砂場とブランコがあるだけの小さな公園。

誰もいない。

斜めになった夕日がオレンジ色にあたりを染めた。

「レナってなに？」

先輩の真剣な顔をわたしは正面から見る事が出来なかった。

「だって、きみがいったんだろ！」

黙っているわたしに少し語気を荒げた。

先輩はわたしの言葉を聞いていたの？

じゃあ……。

「先輩、さっきのは……」

「さっき？」

「覚えていないんですか？」

やっぱりあのキスはレナだったんだ。

先輩は目線を足元に落とすと黙ってしまった。

もしかして、先輩はわたしと違って相手が身体を動かしている時は、

記憶が無いのかもしれない。

それとも、イオがつぶやいた同化。

『同化ってなに？』

イオにたずねた。

『もともと、一つの身体には一つの魂しか入れない。

大抵は地球人の魂を追い出すか殺してから入り込むのだけれど、でも別の身体に入ったものは、少なからず肉体に刷り込まれた記憶の影響を受ける』

『ふ〜ん。じゃあ、イオもわたしの影響を受けているってこと？
そうはみえないけど』

『受けてないから』

『なんで』

『たまにいるんだよ、ほかの魂が入り込んでも平気なおまえみたい
なやつ』

『どうして？』

『鈍いからじゃないの』

『ひどい！』

一呼吸おいてイオは続けた。

『レナは記憶をなくしたまま、無意識のうちに彼の身体に同居して
しまった』

『でも、だからどうなの？ イオだってわたしの身体に居候しているじゃない』

『普通、ある一定時間をすぎると精神力の強い方に吸収されてしまうか、

同化してしまう。大抵地球人の方が未成熟な分、吸収されてしまう確率が高い。

吸収された魂は肉体が滅びるまで暗い檻の中って感じかな。

でも、レナの場合は記憶をなくしていたからかなり広瀬の影響を受けていると思う。

だから、同化してしまう可能性が強い』

『じゃあ、同化するとどうなっちゃうの？』

『化学反応と同じでまったく別の人格になってしまう』

それじゃ、どっちにしても先輩は先輩じゃなくなっちゃうの！？

そんなのいやだ！

第六話：ふたりつきり 2

「……呼ぶときがあるんだ」

やっと聞き取れるぐらいの先輩の声。

「えっ？」

「九条先生もレナって」

先輩が不安げな顔を向ける。

「そうだ、けがはもういいんですか？」

「ああ、あれ、もうなんともない。九条先生が大騒ぎをしたただけだから」

先輩はわたしを安心させるように、右肩を回して見せた。

ほんの少し痛そうに顔をゆがめたがすぐに笑顔を見せた。

「なっ」

「九条先生って、なんか、変ですよね」

あの保健室の事を思い出して、わたしは口走ってしまった。

「そうかな？ いい先生だと思うけど。部活も熱心だし、優しくって」

『あいつは昔からそういうやつだ。　上っ面だけは』

イオが心の中でぼそっとつぶやいた。

「まあ、見た目が、あそこまで完璧だと少し嫌味かな。　そのうえ受け答えもそつが無い」

先輩はほんのちよっぴり笑った。

「完璧な人は浅田さんの好みではないってこと」

「うーん、そうかな。　だって不完全なほうが人間味あるでしょ。完全だったらそれ以上になれないわけで、そんなのおもしろくないもの。」

あつ、でも九条先生の見た目は完璧だけど人間性とかはどうかわからないけど」

「そうだね」

わたしたちは顔を見合わせて笑った。

ふと、あの時かすめた頬の感触を思い出して、わたしは目をそらした。

「キヤー！」

突然、女の叫び声と犬の激しく吠えるのが聞こえてくる。

公園の周りにある皋月の植え込みから、二人飛び出してきた。

小さい方の人影がわたしに抱きつく。

かなり大きい人影は、わたしにしがみついた人物をはがそうとする。

「沙羅に良！」

「伊緒乃ちゃん、沙羅こわいよ」

「は・な・れろー！」

「なんで、沙羅と良がいるのよ」

「心配だったんだもん、伊緒乃ちゃんのこと」

「なんで？」

「だって、先輩があんなことする人だったなんて知らなかったんだもん。

知ってたらあんな賭けなんかしなかったもん。だから、二人つきりに

なったら伊緒乃ちゃんの貞操の危機だと思って」

「飛躍し過ぎだってばあ！」

まったく、なに考えているんだ、沙羅ってば。

沙羅はわたしにしがみついたまま先輩を睨む。

きりつと結んだ口元に膨らんだほっぺ、凄みのある目付きの割にはなんとなくこつちの顔がほころんじやうのは童顔である沙羅の特権だ。

「浅田さんには聞きたいことがあっただけで……なにも……」

先輩には沙羅の凄みが効いたようで、ちょっとおどおどしている。

「あたたなんかね、女の敵よ！ プレイボーイ！ おなたらし！ すけこまし！ その上、

九条先生とあんなことやこんなことやいやらしいこといっぱいしちゃってさ。 この買女め！

わたしの伊緒乃ちゃんにこれ以上手を出したら承知しないんだから！」

「さ、沙羅、違うんだってば、さっきのは先輩じゃ……それに、ば、買女って、日本語間違ってるよ」

先輩は疑問符を撒き散らしたような顔をして尋ねる。

「九条先生とって？」

えっ、えっ！？ そういえば、あの日、沙羅と良もあの場所にいたの！？

「伊緒乃ちゃんにはショックが大きいと思って黙っていましたの。だって、あんなこと、伊緒乃ちゃんがかわいそすぎて沙羅には申し上げることできないでござるですわ」

神妙な？　しゃべり方をしている割には、妙に眼が輝いているように見えるのはわたしの気のせい？

「いつてもいいの？　先輩」

「いつていいも悪いも、俺には」

「しらばつくれるんならいつちゃうもんね。一週間前、広瀬先輩が怪我をした時、保健室での二人がしてたところ見ちゃったんだからねえ、良ちゃん」

わたしと眼が合うと、良はうなづいた。

「二人がベッドで抱き合ってキスしているところ」

「そ、そんなことあるわけないだろ！」

「そんなことあるもんね。　広瀬先輩と九条先生は××の関係だもんね。」

きやつ、いやらしい」

「沙羅と良、今日は悪いけどこれで帰ってくれない。　先輩と二人だけで話したいから」

これはわたしではなくイオの言葉だ。

「はい！　別れ話はきちんとしたほうがいいもんね」

「別れ話もなにも付きあってないって！　先輩に悪いでしょ」

明らかに傍目にも動揺しているのがばれな気がして顔が熱くなった。

「はい、はい、行こう良ちゃん」

二人の去っていく姿を引き止めたい思いを隠して見送った。

このまま先輩と二人っきりになるのが、非常に気まずい。

ふと見上げると、赤い大きな月が空にあった。

第六話：ふたりつきり 2（後書き）

残りも後わずかになりました。

終わりのほうがこんなのでいいのかな？ せっかく読んでくださっている方に、殴られるんじゃないかと不安ですが、何とか書き上げます。

最後までよろしくお付き合いくださいませ。

第六話：ふたりつきり 3

話がしたいといっておきながら、イオは一言もしゃべらない。

静かな時間が流れていく。

でも、わたしの心は穏やかじゃない。

「ねえ、広瀬先輩、ブランコに乗りませんか？」

小さなブランコに座った。

子供用に出来ているブランコは、大人に成りかかったわたしにはちょっと窮屈だった。

わたしはブランコの上に立ち上がり、こぎ始めた。

「わあ！ ひさしぶり！ 子供の頃って、こいだまんま飛び降りたりしませんでした？」

先輩はブランコの周りの柵にもたれていた。

「子供の頃って無茶してたんですね。今は怖くって飛び降りるなんてできないです」

ブランコを止めて降りると、ちょうどだけ先輩の横顔を見た。

先輩から少し離れた柵の上の反対側から腰を掛けた。

『ねえ、イオ、話すことがあるんじゃないの？』

イオの返事は返ってこない。

その代わりに、なんだかわからないもやもやしたものが伝わってくる。

なんか綿ぼこりを喉に詰まらせているようなそんな感じだった。

「田舎へ行った時、いとこに星空を見に連れてってもらったんです。すごく沢山の星が輝いていて、あんな星の数を見ていたら宇宙人がいてもおかしくないだろうなって思えて。あの、先輩は宇宙人を信じますか？」

唐突で変な質問に先輩は困ったように眉をひそめた。

でも、ここでいわなくっちゃ。今いわないで、このまま先輩とレナが同化しちゃったらいやだ。

「あの、わたしの中に宇宙人がいるんです」

わっ、わっ、わっ、唐突すぎるんじゃない？

自分でいっておきながら、パニックった。

で、でも、いわなくっちゃ。

こんな話、レナの記憶がない先輩には、ばかげた話にしか聞こえないだろうけど。

「先輩の中にもレナっていう宇宙人がいて、レナと九条先生が恋人同士で、だから、だから、だから、先輩悪くなくって」

吐ききって苦しくなった呼吸を整えた。

「だから」

「俺、時々記憶が無くなる時があるんだ。でも、それが宇宙人のせいだとは思ってないから。浅田さんが俺を気遣ってくれる気持ちのはうれしいけれど」

「本当なんです。冗談じゃないです」

「ありがとう」

先輩は歩きはじめた。

「ねえイオ、なんとかしてよ。これじゃ、先輩傷ついたまま帰っちゃうよ」

「レナ」

イオがテレパシーを送ると先輩は立ち止まった。

「俺だよ、イオだ」

先輩は振り向いた。

「イオ？」

「もう思い出してくれているだろ、俺のこと」

「知らない」

「そんなはずはない、記憶は戻っているはずだ」

「そうね、イオはなんでも知っている」

「その体に入って、もう一年以上経つんだろ。そのまま、そこにいたらそいつと同化してしまう」

「そうね、それもいいかも」

「なにいつてるんだよ、アールは見つかったんだし……。同化してしまったら、そいつが死ぬまで、もとに戻れなくなってしまう!」

「思い出さない方がよかった。あなたとのこと」

「そうだな、初めから俺たち許婚でもなんでもなければ」

「ふたりして、イオを裏切らなくって済んだ」

「そうだ、レナとアールは堂々と付き合えた」

イオには先輩を通して、彼女の姿が映っている。

違うよイオ、そうじゃない。レナの気持ちをイオはわかっていない。

「イオ、あなたはいつも正しい、エリートさん」

この広い宇宙にたった一人取り残されたように淋しげな微笑を残して、彼女は去っていった。

レナは……

虚しさだけが身体いっぱいに溢れそうになった。

わたしは空を見上げた。

薄明るい空には申し訳程度にともった星が揺れていた。

第七話：一件落着してないぞ 1

つぎの日の放課後、わたしは悩みに悩み抜いてやっぱり輩のことが気になり体育館へ行ってみた。

もうすでに稽古は終わっていた。

いつものように先輩は雑巾掛けをしている。

それを見守るように九条先生が隅に立っている。

先生がバケツに手をかけた時、先輩はそれをもぎ取った。

口論になっているようだけれど、体育館の外にいるわたしのところまでは聞こえてくるわけもない。

でも、イオには聞こえているはずだ。だって、彼にはテレパシ―があるのだから。

二人の会話を聞いてみたいような、やっぱり聞くのが怖いような、複雑な気分。

『二人が何を話しているのか、わたしにも教えてよ』

盗み聞きは、気がとがめたが背に腹は変えられない。

やっぱり、先輩、レナにアールのことが気になるんだもん。

もう部活は終わったのですから、先生はお帰りになって頂いて

結構です。

とつじょ、ぴしゃりと叩きつけたような先輩の声が聞こえてくる。といっても、これはイオの能力を通して聞こえてくるのだから声ではないのだけれど。

先輩は九条先生を無視するように雑巾をバケツで洗い始めた。

先生は先輩の腕をつかむと引っ張って立ち上がらせた。

放してください。

『レナ』

今のは先生のテレパシーだ。しゃべってはいない。

『出ておいでレナ』

手を外そうともがいていた先輩の動きが止まった。

それと同時に、力が抜けたように雑巾が床に落ちた。

きらきらと水滴が舞った。

先生が先輩を抱き寄せる。

「わあー！」

反射的にわたしは大声を上げてしまった。

「だめ！　その身体、先輩のものなんだから！」

「そんな所で立ち聞きなどしていないで、入って来たらどうですか」
叫んでいるわけでもない声が、すぐ側に感じられる。

その声に引き寄せられるように、イオは体育館の中へはいっていった。

「お久しぶりですね、イオ」

「やあ、アール・D・20874・ベルスクス」

「その名前で呼ばれるのも、グラン星を出てからですから、地球でいう五年になりますか。　皆さんお変わりありませんか？」

宇宙人達のありきたりな挨拶に、なんだか面食らった。

これって、地球人と変わらないんじゃないの？

あまりに当たり前すぎて、かえって違和感を感じる。

『浅田さん、それは、私達が地球人に似ているのではなく、地球人がグラン星人に似ているのですよ』

微笑みかける先生の口は動いてはいなかった。

地球人がグラン星人に似ているというのは……

そういえば、初めてイオと会ったとき、イオも同じDNAとかいっていたよね、確か。

ていうことは、地球人とグラン星人は同じなんだ。

な〜んだあ〜。

『同じではないよ。　グラン星人が自分達の移住のために作った惑星の住民がさらに、自分達の移民のために作ったのが地球人。　つまり地球人は、グラン星人のコピーのコピーってわけさ』

さらりとイオは口（？）にする。

コピーのコピー？

「それで、だいぶ粗悪なのが出来てきていますがね。　この身体もやっと見つけて、これまでにするのが大変でしたよ。　それにしても、イオはまたユニークな器を見つけましたね」

「ユニークな器って、先生、それですつごく失礼じゃないですか！」

「私としては最上級の褒め言葉のつもりですけどね。　特異体質のイオは、普通の人間の身体だと一日と立たないうちに同化してしまいますから。　それが起こらないというのは、最高の器ですよ」

「器、器ってね、人を井か茶碗みたいにいつといて、あなた達の星ではどうか知らないけど地球^{こく}ではなんにも褒め言葉になっていない」

「ひとつあなたに忠告してあげます。　あなたの回りでは大勢あな

たを狙っていますよ、器としてですけど」

「どういうこと？」

先生は微笑んだ。

こういう時って、整った顔立ちほどこの笑顔がぞつとする。

「私も浅田さん目当てでここへやって来たのです。あそこのおふたりさんもそのようですね」

先生の目線を追って振り返ると、扉の影から沙羅と良が顔を出した。

「えーっ、ばれちゃったの？ うまく地球人に成りすました思っていたのに、沙羅く・や・し・いー！」

「えっ、えっ、どういうこと？」

『そういうこと』

『そういうことって、沙羅も宇宙人なの？ えっ、えーっ！ イオも知ってたの！？』

「でもね、沙羅、伊緒乃ちゃん気に入ったから乗っ取るのやめにしたの。 からかってるほうがおもしろいもんね」

うつ、わたしはこの二人の宇宙人にかかわれていたのだ。

『今頃、気づいたのか。 どんくさいやつ』

『あんたにかかわれているのだけは、よくわかってるわよ!』

第七話：一件落着してないぞ 1（後書き）

いよいよ残すところあと2話になりました。（たぶん）
最後まで見捨てずにお付き合いいただけたらとおもいます。

第八話：一件落着してないぞ 2（前書き）

あと2話でたぶん終わります、っていつておきながらそのまま2ヶ月間ほったらかしてしまいました。

待っていていただいた奇特なお方、今まで待たせてごめんなさい。やっと終わらせます！ 2話には分けずに今日が最終話です。

第八話：一件落着してないぞ 2

「私も浅田さん目当てでここへやって来たのですが、イオが先に入っていたのは大きな誤算でした」

「おまえに伊緒乃はやらねえ！」

わたしの身体でイオが言う。

「ちよつとまつた!!」

突然わたしは大声を上げてしまった。

「問題はわたしのことじゃなくって、レナさんのことですよ!」

「そうだ、そうだ!」

沙羅が面白半分に関口を出す。

「レナさんが記憶喪失になったのって事故のせいだけじゃないんじゃないの?」

「そうだ、そうだ!」

「イオとアールのせいじゃないの? だいたい、イオには乙女心というものが全然わかってない!」

「そうですね」

アールが他人事のように言う。

「当事者のイオより、浅田さんのほうがよくわかってらっしゃるよ
うで」

「そうだ！ 決闘だ！ 一人の女性を取り合うには決闘だ！」

沙羅がはしゃぐ。

決闘だなんていったいつの時代の話をしているんだ、沙羅ったら。

うゝん、だけど……

青春ドラマによくあるよね、殴り合いのけんかしたあと二人が仲良
くなっちゃうなんて。

はあ？ そういえば今の時代に青春ドラマなんて存在するのか？

こんな時に、なに考えてんだ、そんなのどうでもいい。

三人がもとの仲のよい幼馴染に戻ってくればなんだって。

もう、こうなりややけくそだ！

「二人でとことん戦えば！ わだかまったままずるずるしているよ
りすつきりするかもしれない」

沙羅の意見に賛成したものの、宇宙人の決闘とはどんなものなのか

わからない。

それにやけになって言うては見たものの、そんなことでイオとアールのこじれた問題が解決すると思えないが……

というよりも、一番肝心なのはレナの気持ちじゃないのかな？

「そうかもしれないですね。では、行きますよ、イオ」

えっ、なに？ 納得しちゃったの？

「望むところだ！」

イオとアールの視線がぶつかり合いバシバシ火花が散ってるって感じ。

熱血スポ根アニメだったら絶対瞳の中に炎が燃えてる。

えっ！ どうなっちゃうの！？

その時、体育館内がカーレース場に変わった。

小さな車が二台。

??????

スタートの合図とともに走り出した。

なにこれ？

普通、戦いといえば殴り合いの喧嘩なんじゃないの？

そして、二人ともぼろぼろになったあとで仲直りしちゃうんじゃないの？

それが、ドラマの常識でしょう。

先輩がくすりと笑う。

「変わらないわね、二人とも」

『えっ？』

『子供の頃から二人ともこれが好きなのよ』

『レナさん？』

『始まったわ』

青い車が赤い車を追い抜くと、赤い車はスピードをあげ青い車の横につけると体当たりを始めた。

『イオの車が』

『赤い方。 負けず嫌いだもんね、 あいつ』

『そう、伊緒乃ちゃんはイオのことわかっているのね』

『まあ、一心同体ですから』

目の前では暴走した二台の車のバトルが展開されていたはずだが、いつの間にか車が怪獣に変わっている。 しかも、次第に巨大化していく。

『なに、これ？ イオだけならばいざ知らず、先生の性格もこんななの？』

宇宙人の決闘ってすつごくばかげていない？

『イオってね、超エリート家系の跡取なのよ』

『うつそー！』

『様々な能力も長けているしね』

『信じらんない。 アールの方がエリートだっていうならわかるけ

ど
』

人は見かけによらない……いや、性格によらない……まあ、とにかく今のイオからは想像がつかない。

バトルは天候戦に変わっていた。

大雨や雷、地震や吹雪、炎に稲妻！

あめあられ %&! !

もう体育館内は上や下への大騒ぎ、ひっちゃかめっちゃかの右往左往、ごちゃごちゃになっていた。

これって、現実を起こっているわけじゃなくって、幻想を見せているだけらしいのだけど。

『わあー！』

肉体的に結構きつい。

熱いし、寒いし、目はチカチカ、しんどいし！

『あつ！ あのー、レナさんてアールを追いかけてきたっていうけど、本当はイオの事が……わあー！』

突然雪崩がわたしに襲い掛かってきた。

肉体のわたしではなく、精神の世界でのわたしにだ。

今繰り広げられているイオとアールのバトルは、現実ではない、幻想の世界だ。

そう、現実ではないと思い込もうとしても怖さが襲ってきた。

「浅田さん！」

先輩の声とともに羽毛に包まれたかと思ったら、現実に戻されていた。

気が付くと倒れているわたしの上に覆い被さるように先輩が倒れていた。

「せ、先輩」

先輩は床につけた手を伸ばすと、わたしから身体を離れた。

「大丈夫だった？」

「うん。先輩にも見えていたんですか、あの景色」

なんだか、こんな体勢のまま話しているのもなんだか恥ずかしくって、起き上がるうとしたが身体がなんだかコンクリートで固められてしまったように重くて動かない。

「伊緒乃……」

先輩の息が首筋にかかる。

ちょっと待って！ 心の準備が、
ってそういう問題じゃないって。

先輩の顔が上からわたしを見つめる。

「やめて、レナ！」

これって、先輩とレナが同化し始めているって事？

先輩の顔が目の前に迫ってきた時、突然大声が響き渡った。

いや、声ではなくレナのテレパシーだ。

『じゃましないでよ！』

『どういっつもりだよ！』

イオとレナの言い争う声。

それと同時に先輩が飛びのく。

『わたしは彼と同化する事に決めたのだから』

『なにバカなこといつているんだよ』

『バカなのはイオの方よ。 鈍感なんだから』

ちよっち、ちよっち待って、これってわたしの中で二人は言い争っ

ているわけ？

『彼の身体に戻るのだから放してよ！ これから彼になるのだから』

『それで、どうするんだよ。 そんな事をしたら、彼が死ぬまでレナ自身に戻る事は出来ないんだぞ。 レナは家を捨ててまでアールを探しに来たんだろ』

「きみは本当にバカだな」

いつものごとく人事のように冷静な九条先生。

「ああ、バカだよ。 許婚を親友だと信じていたおまえに取られたのだからな」

「それがバカだということです」

「なんだと！ まだやる気が」

「レナはきみの事が好きなのですよ」

わたしもそう思う。

「なのにイオは家同士が勝手に決めたことだからと反発していたでしょ。 レナは淋しかったのですよ。 だから、きみに焼きもちを焼かせようとして。 そして今、広瀬君の身体に戻ろうとしているのは、イオの好きになった人を奪ってやろうと思う嫉妬心と、それとは裏腹に他人の身体を通してでも君と結ばれたいと思う女心のいじらしさ」

「なに勝手に詮索しているのよ!」

わたしの身体を通してレナがしゃべった。

あ、あの、今さらつと流れちゃったけど、結ばれるって?

『イオの好きな人って、レナじゃないの?』

「浅田さんも自分のことになると、うといようで」

「そこがかわいいのよね」

「な、なによ、沙羅まで」

あの日、急転直下のどたばたから数日立った日。

『前に、風呂で洋ナシなんて言ってごめんな』

あいも変わらず、イオはわたしの身体に居候している。

『いいよ、別に気にしてないから』

「伊緒乃、今日は部活がないから一緒に帰ろう」

「せ、先輩！」

レナは今も広瀬先輩の中にいる。

先輩がわたしの手をつかむ。

いや、これはきつとレナだ、先輩はこんなことはしない。

すぐに先輩は慌てて手を放す。

今先輩に戻ったのだろう。

わたしてきにはもう少し、手をつないでいたかったんだけど。

『あ、あの、なかなかよかった』

イオが言った時、レナが唐突に話題に割り込んだ。

『何がよかったの！』

『わっ！』

先輩と同化しないように、時々レナは同化のしにくいわたしの身体に勝手に入りこんでくる。

その度にレナとイオは大喧嘩をする。

わたしとしては、まったく大迷惑である。

「伊緒乃ちゃんは沙羅と一緒に帰るの」

わたしの身体に沙羅がしがみ付く。

童顔のくせに大きな胸がわたしの背中ではぶよんぶよんと躍る。

「離れる！」

良はいつものごとくわたしを沙羅から引き離そうとする。

だがイオは沙羅の胸の感触を楽しんでいる。

これではレナが焼きもちを焼くのも無理からぬ事。

「ああ、ここにいたのか広瀬くん、ちょっと部活の事で……ううん？ あっそうそう、浅田さんに用があったのです」

九条先生の魂胆も見え見えだ。

間違いなくレナに会いに来たのである。

それにしても、ますます妙に絡まったこの複雑な関係は、いったい

どんな関係というのだろうか？

第八話：一件落着してないぞ 2（後書き）

ふうー、終わりました。

第二話で出てきた大友くん、本当は名前を出そうかどうか迷ったのですが、出したのに出番はあそこで終わってしまいました。本当は話にもっと絡ませたかったのですが、あきらめました。

最後までお付き合いいただきありがとうございました。

お付き合いいついでにコメントなどを頂けたら、作者、小躍りして喜びますので。

よろしく願いします！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9547c/>

不思議な関係

2010年10月14日14時31分発行